

平成 17 年度（第 49 回）
岩手県教育研究発表会発表資料

教 育 相 談

学校不適應児童の自己受容を促す 指導・援助に関する研究

- 自分を見つめる活動をとおして -

平成 18 年 1 月 13 日
長期研修生
所属校 花巻市立花巻小学校
氏名 久保田 葉子

< 目 次 >

研究目的	1
研究仮説	1
研究の内容と方法	1
1 研究の内容と方法	1
2 対象	1
研究結果の分析と考察	1
1 学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助についての基本構想	1
(1) 学校不適応児童の自己受容を促すことについての基本的な考え方	1
(2) 自己受容を促す指導・援助に自分を見つめる活動を取り入れる意義	2
(3) 自分を見つめる活動の進め方	2
(4) 学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助についての基本構想図	4
(5) 検証計画	5
2 学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助の実践	} 別冊資料参照 (資料は当日配布)
3 実践結果の分析と考察	
4 学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助についてのまとめ	
研究のまとめと今後の課題	5
1 研究のまとめ	5
2 今後の課題	6

おわりに

【参考文献】

研究目的

学校不適応児童の指導・援助にあたっては、児童の心情や行動を共感的に受けとめながら、児童が自分を見つめ、自己受容していくように支えていくことが大切である。

しかし、学校不適応を起こしている児童の中には、自己受容しにくい状態になっている児童が見受けられる。これは他者から認められた体験が少ないことや、共感されている感覚がもてないことにより、自分のよさに目が向きにくくなっているためと思われる。

このような状況を改善するためには、援助者との信頼関係を基盤として、過去に受けてきた関心や賞賛を振り返りながら、自分の気持ちを整理して自分のよさを知ることが必要であると考えられる。

そこで、この研究は、自己受容しにくい状態になっている児童が、援助者とともに自分を見つめる活動をとおして、自己受容できるような指導・援助の在り方について明らかにし、学校不適応児童の指導・援助に役立てようとするものである。

研究仮説

学校不適応児童の指導・援助において、過去を振り返りながら自分の気持ちを整理する自分を見つめる活動を行えば、児童は自分のよさを知り、自己受容が促されるであろう。

研究の内容と方法

1 研究の内容と方法

(1) 学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助についての基本構想の立案（文献法）

学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助についての基本的な考え方をまとめるとともに、基本構想を立案する。

(2) 基本構想に基づく指導・援助の実践（面接法・観察法）

基本構想を基に、自己受容を促す指導・援助を実践する。

(3) 実践結果の分析と考察（記録法）

実践結果について分析と考察を加えることにより、基本構想に基づく指導・援助の在り方を確かめる。

(4) 学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助についてのまとめ

実践結果の分析を基に、学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助についてのまとめをする。

2 対象

平成 17 年度岩手県立総合教育センター相談室来談児童

研究結果の分析と考察

1 学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助についての基本構想

(1) 学校不適応児童の自己受容を促すことについての基本的な考え方

学校不適応児童の中には、自己受容しにくい状態になり、自分を肯定的にとらえられなくなっている児童が見受けられる。このような児童は認められた体験が少ないことや体験していても受容体験として意識されなかったこと、共感されている感覚がもてないなどの理由から自分のよさに目が向きにくくなっていると思われる。

そこで援助者との信頼関係を築きながら、自分のよさを知るために自分を見つめる活動が必要である。他者とのかかわりを振り返り、肯定的なとらえ方に目を向けながら自分の気持ちを整理することにより、受容体験を知ったり、共感された感覚を味わったりすることで、自分のよさに気付くようになると考える。ここでいう「よさ」とは、児童が肯定的に受け容れることができる体験や自分の特徴のことであり、児童にとって元気のもとになるものである。そして自己受容とは、自分について意識していなかったことを確かめ、それを手がかりに過去に受けてきた関心や賞賛を振り返りながら、自分のよさに気付くことである。自己受容が促された児童は、自分のよさに気付きやすくなり、自分を肯定的にとらえることができると考える。

(2) 自己受容を促す指導・援助に自分を見つめる活動を取り入れる意義

自己受容しにくい状態になっている児童が自己受容するためには、援助者からの関心を感じながら、児童も自分自身に関心を持ち、自分のよさに気付いていくことが必要である。

「よさ」には、自分では気付いてなくても他者から評価されることで気付く「よさ」がある。自分で気付いている「よさ」も、他者からの評価が積み重ねられた結果、意識できているという場合も少なくない。このことから、児童が自分のよさに気付いていくとき、これまでの他者とのかかわりが重要な意味をもつと考えられる。また児童が否定的に受けとめていることであっても、見方を変えれば「よさ」になる場合がある。たとえば新しいことに取り組みにくいことを「臆病」と見ることもできるが、見方を変えれば「慎重」と見ることもできる。さらに「慎重である」ことをどう受けとめるかによってよさになる場合もならない場合もある。どんな見方、受けとめ方をするかで、よさへの気付きやすさが違ってくるのである。これらのことから、自己受容しにくくなっている児童がよさに気付いていくとき、「他者とのかかわり」と「見方や受けとめ方の傾向」が重要な役割をもつと考える。しかしながら児童がそれらを意識しているとは言い難い。

「自分を見つめる活動」とは、自分について意識していなかったことを確かめ、確かめたことについての気持ちを整理することである。児童は、好きなものや夢中になれることという興味・関心の対象やものの見方、受けとめ方の傾向など、自分について意識していないことを、援助者とともに確かめていく。援助者は、児童が安心して活動できるように受容的・共感的にかかわりながら、児童の言動を振り返らせたり質問をしたりする。自分に目を向ける際の手がかりや確かめた自分の姿が見えるように、これらの活動をシートやマップに表すこととする。最初は曖昧にしか表現できなくても、書き加えたり修正したりしながら、自分の姿や自分のよさが徐々に確かめられていくと考える。さらに確かめたことについてなぜ好きなのか、どんなきっかけがあったのかなど理由も考えてみることにより、忘れていた過去の体験やそれにまつわる他者とのかかわりを思い出し、気持ちが整理されていくと考える。援助者はまた、児童の気持ちを受容的・共感的に受けとめながら、児童の見方、受けとめ方が肯定的な場合はそれを支持し、否定的な場合は肯定的な見方、受けとめ方を示していく。

このように、自分を見つめる活動の意義は自分について意識していなかったことを確かめ、確かめたことを自分のよさとして肯定的に受け容れていくことにある。

(3) 自分を見つめる活動の進め方

学校不適応児童の自己受容を促すことの基本的な考え方に基づいて、自分を見つめる活動を次のよう進める。

ア 自分のよさに目を向ける過程

この過程では、自分の興味・関心の対象やものの見方、受けとめ方の傾向など、意識していなかったことをシートに書き込みながら確かめていくようにする。児童が安心して考えたり表現したりできるように、児童の望む活動をいっしょに行ったり、児童の活動を受容的・共感的に受けとめたりしながら、必要に応じて援助者も自己開示をしていく。シートは、二者択一で答えられるものから自分の言葉で答えるもの、自分自身のことから他者とかかわることへと進めることとする。この過程の最後に積み重ねたシートを1枚の自分マップ(さんマップ)に再構成する。確かめた自分の姿を児童自身が見やすくなり、次の段階で整理するとき作業しやすくなることを考えるためである。再構成することでよりはっきり確かめられることも期待できる。児童が自分のものの見方、受けとめ方の傾向に気付くための手だてとして、援助者が鏡になって児童の言動を映して返すことや反対の見方、受けとめ方を示すこととする。援助者がリフレイミングコイン(コイン型の厚紙)を準備しておき、物事に対する否定的な見方をしたときには、コインの反対側に肯定的な見方を書いて示し、視覚的にもわかるようにする。

イ 自分のよさを知る過程

この過程ではアの過程で確かめたことについて、他者とのかわりに目を向け過去に受けてきた関心や賞賛を振り返りながら、自分のよさとして肯定的に受けとめていく。アの過程でつくった自分マップに自分の気持ちを書き加えながら整理する。児童が肯定的に受けとめていることは、マップ上に色づけするなどしてよさとして支持し、逆に否定的に受けとめていることに対しては、リフレイミングして肯定的な受けとめ方をするように働きかける。次に整理された自分マップを手がかりに自分と他者とのかわりに着目しながらマップとして表す。矢印の向きや太さで関係を表していく中で、他者から認められた体験を確認したり、共感された感覚を味わったりすることにより、自分のよさを知り自己受容が促されると考える。

自分を見つめる活動の各過程のねらいと指導・援助の手だては【表1】に示す。

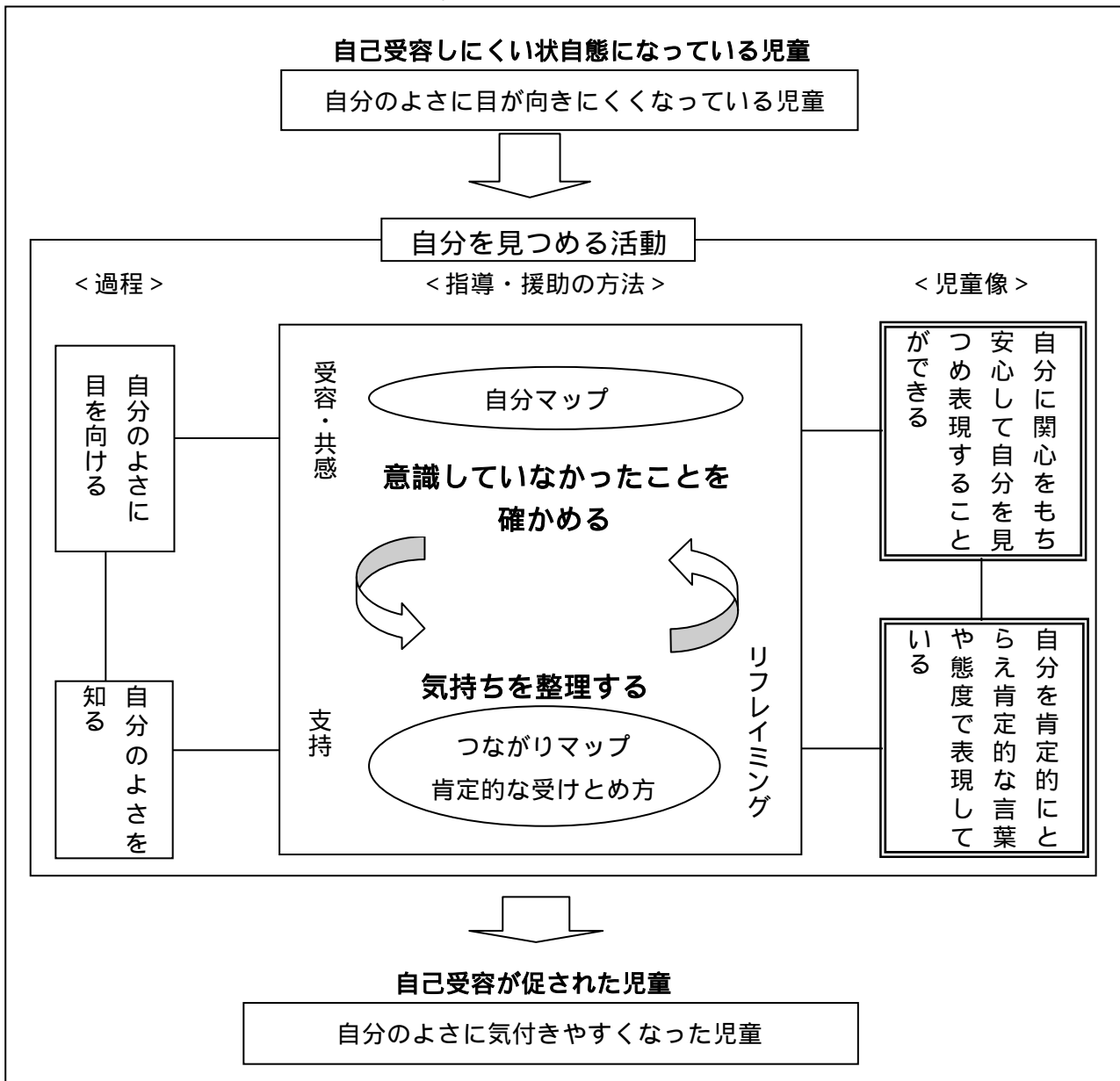
【表1】自分を見つめる活動の各過程のねらいと指導・援助の手だて及び留意点

過程	活動のねらいと指導・援助の手だて	留意点
自分のよさに目を向ける	1 自分の興味・関心の対象等、意識していなかったことを確かめていく ・安心して考えたり話したりできるように受容的・共感的なかわりかたをする ・確かめながらシートに書きこむようにする ・さんマップとして1枚に再構成する 2 自分のものの見方、受けとめかたの傾向に気付くようにする ・児童の言動を鏡になって返す ・リフレイミングして肯定的な見方を示す	・援助者もいっしょに活動しながら必要に応じて自己開示する ・二者択一で答えるものから始める ・自分自身のことから他者とかかわることへ進める ・新しい気づきを大切にする ・視覚にも訴えるように工夫する(リフレイミングコイン)

過程	活動のねらいと指導・援助の手だて	留意点
自分のよさを知る	3 自分の気持ちを整理できるようにする ・前段階で作ったマップに書き加えるようにする ・新しいマップに再構成する(つながりマップ) 4 整理された気持ちを肯定的に受けとめることができるようにする ・肯定的に受けとめていることはそのまま支持する ・否定的に受けとめていることは、反対の見方を考えさせる	・他者とのかかわりを振り返る ・言葉や図や記号で表す ・関係を矢印の向きや太さで表す ・マップ上に色づけをする ・リフレミングコインに自分で書きこむ

(4) 学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助についての基本構想図

基本的な考え方に基づいて、学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助についての基本構想図を【図1】のようにまとめた。



【図1】 学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助についての基本構想図

(5) 検証計画

基本構想に基づき、各過程の指導・援助についての有効性を【表2】のような分析の観点と内容で検証する。

【表2】各過程の分析の観点と内容

過程	分析の観点	分析の内容
自分のよさに向けて目を向ける	1 自分の興味・関心の対象など、意識していなかったことを確かめることができたか 2 自分のものの見方、受けとめ方の傾向に気付くことができたか	・安心して表現している ・自分について新たな気づきをしている ・援助者の示す見方、受けとめ方に反応している
自分のよさを知る	3 確かめた自分について、気持ちを整理することができたか 4 整理された気持ちを肯定的に受けとめようとしていたか	・自分の気持ちを書いたり話したりする ・マップに再構成しようとする ・自分を肯定的にとらえ、肯定的な言葉や態度で表現している

- 2 学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助の実践 別冊資料参照
- 3 実践結果の分析と考察 別冊資料参照
- 4 学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助についてのまとめ 別冊資料参照

「注」個人情報保護のため事例にかかわる資料は当日配布いたします

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

この研究は、過去を振り返りながら自分の気持ちを整理する自分を見つめる活動をとおして、自己受容を促す指導・援助の在り方を事例によって明らかにし、自己受容しにくい状態になっている学校不適応児童の指導・援助に役立てようとするものであった。その結果、仮説の妥当性が確かめられ、成果として次のことが得られた。

(1) 学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助についての基本構想の立案

学校不適応児童の自己受容を促すことについての基本的な考え方や自分を見つめる活動を取り入れる意義、進め方を明らかにし、基本構想としてまとめることができた。

(2) 基本構想に基づく指導・援助の実践

基本構想に基づく指導・援助の実践を対象児童に行ったことにより、自分を見つめる活動を取り入れた指導・援助の手だてが、学校不適応児童の自己受容を促す上で効果的であることが確かめられた。

(3) 実践結果の分析と考察

指導・援助の実践の分析と考察により、対象児童の自己受容が促されてきていることが認められ、手だての有効性を見ることができた。

(4) 学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助についてのまとめ

学校不適応児童の自己受容を促す指導・援助について、対象児童への実践から成果と課題を明らかにすることができた。

2 今後の課題

(1) 自己受容を促す指導・援助について、自分を見つめる活動を取り入れた指導・援助の手だてを児童の実態に応じて検討していく必要がある。

(2) 本研究の対象児童への実践を継続するとともに、他の事例での実践を重ねながら、基本構想に基づいた指導・援助の在り方を探っていく必要がある。

おわりに

長期研修の機会を与えてくださいました関係諸機関の各位並びに所属校の諸先生方と児童のみなさんに心から感謝申し上げ、結びのことばといたします。

【参考文献】

梶田叡一(1993),『生き方の人間教育を』,金子書房

河村茂雄編(2004),『ワークシートによる教室復帰エクササイズ』,図書文化

七條正典(2005),『児童心理 10月号「振り返り」から生まれる自信』,金子書房

諸富祥彦監修 大竹直子著(2005),『自己表現ワークシート』,図書文化

山川久恵 宮本正一(2001),国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要

『不登校児のためのキャンプが参加親子の自己受容に及ぼす効果』

京都府総合教育センター(2001~2003),

『自己コントロールする力が育ち、自己肯定感が実感できる学習の在り方』